

そこへ干草を積んだ小さなトラックが通りかかり、彼らの様子に気づいて止まった。

「どうかしたかね？」

クロフカは必死になって車からおりてきた人に訴えた。

「 助けてください！ …… テオおじさんが！ …… おじさんが大変なんです …… 」

その人は静かにゆっくりとテオおじさんをトラックの助手席に乗せた。そして、心配そうに見上げている黒い犬を見て

「 犬も乗せるかい？ 」

「 …… 乗せてもいいかい？ 」

「 もちろんだとも …… あ、ちと狭いかな …… この犬、荷台には乗れるかい？ 」

クロフカは首をかしげて、ことの成り行きを見守った。

ややあって、テオおじさんが

「 いや、犬はいい …… な、クロフカ、お前、こっからの道は分かるだろう。後からついておいで …… 」

のろのろと進むトラックの後を、クロフカは心配そうに吠えながら、必死に追いかけた。

かつて、こうして車の後を必死に追ったことがあったのは、いつのことだったか …… 。

今はこうしてこの車の行く先も姿もはっきりと分かるのに、この不安感は何なんだろうか。

家までのいつもの散歩道が、とても遠く感じられた。

やがて、夕闇の中、車は家の門をくぐり、前庭に止まった。

工房からは、若い職人さんが道具を持ったまま飛び出してきた。

家の裏口からは、マーサおばさんが前掛けで手を拭きながら、駆け

寄ってきた。

誰も皆、遠くから聞こえてきたクロフカの声にただならぬものを感じたのだった。

テオおじさんは、皆に抱えられるようにして家の中に入っていった。

クロフカは、車から降りる際にテオおじさんの落とした手袋の片方を

銜えて、庭に座り込んだ。

此処から家の様子を窺うしかなかった。

手袋は、皆に踏まれて靴のあとがいくつもついていた。

冬は駆け足でやってきた。

再び、テオおじさんが病院に行くことになった。

急だった。

雪まじりの中、テオおじさんを乗せた車は、凍った地面をビシビシと軋んだ音をたてながら門を出た。

「 ……おじさん …… 」

そして、今度は帰らなかった。

ある日、マーサおばさんが大きなボウルにたくさんのご飯と、犬用のビスケットを山盛りにした器を持って犬小屋の前に置いた。傍らには、もうひとつの大きなボウルにきれいな水が入って置かれている。

「クロフカ……2と3日、家を空けるよ……」

マーサおばさんは、黒いドレスの見慣れない格好をしていた。

「留守番を頼むよ……おじさんを……」

消えそうな声でつぶやいた。

「……連れて帰ってくるからね……」

マーサおばさんに乗せた車が走り去るのを、クロフカは不安そうに見送った。

「……留守を守らなくっちゃ……」

時折、人が訪ねて来たが、どんな人もクロフカは喉を鳴らして威嚇した。

しかしその内心、彼は心細かった。

夜、ひと気のない家の玄関先に座り、前肢を伸ばして交差させると、その上にあごを乗せ、ひとつ大きなため息をついた。

「……みんな、何処いっちゃったんだろう……」

澄みきった冬の夜、ゆっくりと流れ降りてくる冷気の中に、わずかも飼い主の匂いを探そうと、クロフカは顔を挙げ、その鼻先を夜空へ向けた。

見上げる空には、オリオンが冴え冴えと輝き、降るような星空である。

「 ……僕ア、また置いてきぼりになっちゃったのかなあ……」

見上げる夜空の中で、大きな星がひとつ、流れた。

「 テオおじさんもマーサおばさんも、みんな……何処いっちゃったんだろう……」

おばさんが用意してくれた食事は殆ど口にできなかった。

長い長い三日間だった。

三日後、マーサおばさんは、たくさんの花束とともに帰ってきた。

大事そうに両手で何かを抱えているおばさんのその姿は、とても小さく見えた。

それ以来、クロフカがテオおじさんに会うことは、もうなかった。

おじさんの工房は、閉じられたままになった。

つづく